

三 八郎太郎と辰子姫

院内の里に「辰子」という世にも稀な美しい娘がいた。辰子は、母と二人暮らしであったから、母を助けてよく働いた。

ある秋も深い日のこと、今日も一日木の葉をつんで山を歩き回った辰子は、泉のそばに坐って水をのみ、髪をくしけずった。泉の面に映し出された自分の美しさに、このとき辰子は始めて気づいた。

“この美しさを失いたくない、年をとりたくない”、このときから辰子は変わった。

やがて、真夜中になると家を抜け出して院内獄にある観音堂へかようのが見られるようになった。そして一〇〇日目の満願の夜がきた。辰子

は、夢うつつに観音さまの姿を見、声を聞いた。

「辰子よ、かわいそうな辰子よ、お前がそれほど願うのなら、この山を北へ北へとふみわけていくがよい。そこに清らかな泉が湧いているから、その水をのめばお前は永劫の美しさを得ることが出来るだろう……。しかし、その前にもう一度よく考えてみるがよい。お前のねがいは、人間の身には許されないのだということを……。そのときになって悔いても遅いのだ。」

しかし、永遠の美を求める辰子の考えは変わらなかった。院内獄をこえ、霧森をすぎ、やがて高鉢山の下へたどりつき、とうとう泉を発見した。氷のような水をひとくち、ふたくちのんだ。のどは急にやけつくようにかわき、のんでも、のんでも、かわきはますますばかりであった。……。どのくらいのみ続けただろう、いつか、辰子は竜の姿に変わっていた。やがて、あたりが薄暗くなったかと思うと、天地がさけるように雷の音がとどろき、しのつくような雨が降り出してきた。とみるまに山は崩れ落ち、谷はさけて、山の形はみるみる変わった。田沢湖ができたのである。

永遠の若さをたもち、美しい辰子に南祖坊が思いをかけ、なんとかしてのぞみを逃げようとしたが、辰子は、荒々しい南祖坊を嫌い抜いた。ついに、鉄杖や鉄のわらじを思い出すさえいやだったので、今でも、田沢湖では舟に鉄をつかわないという。

この辰子も、八郎瀧の八郎とは深い契りを結び、寒い冬になると八郎は田沢湖へやってきて辰子のもとで冬を過ごすので、田沢湖は冬でも凍

ることがなく、年々その深さを増しているという。反対に、ぬしが留守がちの八郎瀧には氷が張りつめ、年ごとに浅くなっていくという。